

第 39 回 愛知県母性衛生学会学術集会
プログラム・講演抄録集

日時：令和 3 年 5 月 16 日（日）9 時 30 分～12 時 15 分

場所：オンライン開催（Zoom）

名古屋市立大学看護学部棟 308 講義室

愛知県母性衛生学会

第 39 回愛知県母性衛生学会総会・学術集会プログラム

開催日：令和 3 年 5 月 16 日（日）

9 時 30 分～12 時 15 分

場 所：オンライン開催（Zoom）

テーマ：性の多様性を考える

1. 開場受付 9 時 00 分～
2. 会長挨拶 9 時 30 分～9 時 40 分
3. 一般口演 9 時 40 分～10 時 20 分

座長：名古屋市立大学大学院看護学研究科 木村奈緒美

1) 看護学生を対象とした月経時の薬剤使用に関する実態と意識

1) 愛知医科大学看護学部

○辻 桃花¹⁾ 小島 徳子¹⁾ 山本 弘江¹⁾

2) 月経痛・月経前症候群の対処行動の実態と支援のあり方

1) 名古屋市立大学病院看護部（中部大学生命健康科学部保健看護学科 12 期生）

2) 中部大学生命健康科学部保健看護学科

○北村 優菜¹⁾ 横手 直美²⁾

3) 出産施設と大学の協同によるオンライン子育てセミナーの開催報告

－母親のアンケート結果による評価とニーズ－

1) 中部大学 生命健康科学部 保健看護学科

2) 春日井市民病院 看護局

○岡倉 実咲¹⁾ 山下 恵¹⁾ 横手 直美¹⁾ 吉田 明恵²⁾ 奥田 浩子²⁾

川原 直子²⁾

4. 休憩 10 時 20 分～10 時 30 分

5. 教育講演 10 時 30 分～11 時 30 分

講師：名古屋市立大学大学院

金子 典代

座長：名古屋市立大学大学院医学系研究科産婦人科学分野

杉浦 真弓

6. シンポジスト講演 11 時 30 分～12 時 10 分

講師：愛知県公立中学校教諭 特定非活動法人 ASTA 所属

浦田 幸奈

座長：名古屋市立大学大学院医学系研究科産婦人科学分野

杉浦 真弓

7. 閉会の挨拶

教育講演

『セクシャルマイノリティ特有の健康課題の理解と求められる対応』

名古屋市立大学大学院看護学研究科 金子 典代

セクシャルマイノリティについては、異性愛者と比較して様々な健康リスクが高くなることが世界的に報告されています。私はゲイバイセクシュアル男性における HIV 感染症の予防やセクシャルヘルスプロモーションに長らく関わってきました。ゲイバイセクシュアル男性の HIV 感染症対策については、当事者の活動、保健医療従事者の努力により HIV 検査を受けやすい環境など 15 年前に比べて改善されてきました。しかしセクシャルマイノリティの中でも GID/GD/トランスジェンダーの方々が抱える特有の健康課題については日本では実態研究も著しく少なく明らかになっていません。ゲイバイセクシュアル男性の HIV 対策での経験を活かせるならと考え、2020 年から GID/GD/トランスジェンダーの方々が抱える健康課題や医療アクセスの問題について実態を明らかにする研究に携わり始めました。

本日の講演では、2020 年 5 月に実施した調査結果について、484 名の当事者からの回答をもとに当事者の医療ニーズや医療サービスを利用したいと思ってもあきらめている方が多い実態、受診先や入院先の医療機関でも様々な困難に直面している方が多い現状をお示しできればと思います。その他、治療経験、ホルモン剤使用の状況、体調不良時の医療機関の受診をためらった経験、受診時に医療従事者に配慮してほしいこと、医療従事者に理解してほしいことについての調査結果を共有します。GID/GD/トランスジェンダー中にも多様性があること、また望む医療サービスも人生のステージで様々であることをお伝えできればと思います。また医療機関でできる当事者への配慮、当事者が利用しやすい医療機関にするにはどうすればよいか、についても実際の事例を示しつつ、一緒に考える機会となればと思います。

《略歴》

名古屋市立大学看護学部国際保健看護学准教授、看護職を目指す学生への教員、大学院生の研究指導に関わる。1999 年大阪大学医学部保健学科卒、卒後、米国南部の大学院留学時にエイズ予防の研究に出会い現在まで続けている。特にゲイバイセクシュアル男性における HIV 感染症予防、セクシュアルヘルスプロモーションの研究に力点を置き携わってきている。2020 年にトランスジェンダーの医療アクセスに関する実態調査を実施した。

シンポジスト講演

誰もが自分らしく生きられる社会づくり ～学校・学級における性的マイノリティとの共生～

特定非営利活動法人 ASTA 所属 愛知県公立中学校教諭 浦田 幸奈

「知ることのできる事が見えてくる」「知識と人脈が増えることで笑顔が広がる」を理念に20年以上教育活動を行っています。先日、警察庁から「横断禁止」の標識を「わたるな」という表記に変えることへの意見募集がありました。私はそれを見て、誰にでもわかる表記によって、子どもだけでなく、外国人も安心して過ごせると感じました。階段に併設されたスロープに関しても、存在することで、車いすの人だけでなく、キャリーカートやキャリーケースを使っている人も難なく同じ場所にたどり着くことができます。このような「そういう人が当たり前存在する」という意識が、想定、発想、行動につながり、すべての人が生きやすくなっていくと私は考えます。

性的少数者の中には思春期に「男らしさ・女らしさ」「異性への関心」などの文字や言葉に出会い、自分は他と違う、自分だけなのではないかと不安になり、自己肯定感を持たずに過ごしている人がいます。本人も友人も大人も、知らないがために、傷ついたり、傷つけたり、生きづらさを抱えたりしています。NPO 法人 ASTA は、それらの問題を改善するために、当事者・当事者を取りまく家族や友人との交流を通して、幼少期・青年期における正しい知識の教育と、教職員や保護者、会社組織など社会全体への啓発を行っており、私もその一員として活動しています。

学校には、多様性への理解を深める機会が数多く存在します。教科書にみられる多様性(肌の色、車いす利用の同級生)に気づかせたり、ブラインドサッカーや車いすバスケットに関心をもたせたり、目を細めて黒板を見ている友達や、転入生や外国人ルーツの人に対してどんな声かけができるかをともに考えたりできます。また、男女2種類に分けられた制服や名簿に苦しむ生徒や、異性愛前提で話題をふられると困る生徒がいることを教員が知っているどうか、適切な対応や指導ができていくかどうかで、集団の雰囲気や当事者の自己肯定感が大きく変わります。

たくさん道を知っている人ほど、自分自身が迷いにくく、また、誰かに道案内をすることもできると私は思います。同じように、学校・学級において、皆が多様性を知り、他者への貢献を通して互いに自己肯定感を高めあうことができれば、誰もが自分らしくのびのびと生きられる社会が作られていくのではないかと考えています。参加者のみなさんの中には、子どもと多くふれあう方、子をもつ保護者と多く接する方もみえると思います。私が学生時代や職場において自身のことを隠してきた理由や、4年前に学級の生徒達へ公表してもきっと大丈夫だと思えた理由、公表後の生徒の反応を紹介しながら、学校現場に限らず、多様性の中のひとつである性的マイノリティを皆が当たり前の存在ととらえ、共に生きていく社会をつくるために誰にどんなことができるかを、ともに考えていけたらと思っています。

《略歴》

愛知教育大学教育学部卒。愛知県の中学校教諭。特定非営利活動法人 ASTA 所属。トランス女性。2017年、学級・学年・職員に性同一性障害を告白。異動を機に、2018年度より女性名・女性の装いで教壇に立つ。「知ること、できる事が見えてくる」を理念に、多様性を尊重し、横のつながりを大切にする集団づくりに努めている。

1. 看護学生を対象とした月経時の薬剤使用に関する実態と意識

辻 桃花¹⁾ 小島 徳子¹⁾ 山本 弘江¹⁾

1) 愛知医科大学看護学部

本研究の目的は、看護学生を対象に、月経痛に対する薬物使用の実態と意識について明らかにし、月経痛に対する適切なセルフケア行動の示唆を得ることである。

今回、中部地区私立系4年制大学看護学部1施設の1学年から4学年に所属する女子学生400名を対象に無記名自記式質問紙調査を行い239名から回答を得た(回収率59.8%)。

その結果、月経痛があるものは87.0%で、そのうち生活に支障があるものは39.7%であった。月経痛緩和のために薬剤を使用していたものは75.2%で、最も使用されていた薬剤は市販の鎮痛薬で53.6%であった。

薬剤使用に対し、積極的に使いたいと回答したものは36.4%、できるだけ使いたくないと回答したものは45.2%、絶対に使いたくないと回答したものは1.3%であった。また、薬効の減弱が心配であるものは37.7%、薬剤への依存が心配であるものは18.4%、副作用が心配であるものは15.5%であった。

薬剤使用に対する考えと薬剤使用に対する不安に有意な関連が認められ、できるだけ使いたくないと回答したものは、積極的に使いたいと回答したものに比べて、薬剤への依存や薬効が弱まることへの心配を持っていることが明らかとなった。

看護学生が大学で学んだことが、安易な薬剤の使用を控えるという月経痛に対する対処方法の変化に影響を及ぼしたと推察される。変化に影響を与えたものをさらに検討することで効果的な月経対処行動につながることを示唆された。

2. 月経痛・月経前症候群の対処行動の実態と支援のあり方

○ 北村 優菜¹⁾ 横手 直美²⁾

1) 名古屋市立大学病院看護部(中部大学生命健康科学部保健看護学科 12期生)

2) 中部大学生命健康科学部保健看護学科

月経は女性の人生の半分に関わる生理的特性であり、心身の健康状態の指標でもあり、月経痛などの不快症状も大多数の女性が経験することが知られている。さらに初経年齢は10~14歳が多く、月経痛を感じる者が増加する年代が中高生にあたり、授業に集中できない、保健室での休養が必要となるなど、学業に影響を及ぼす場合がある。

本研究では女子学生が実施する月経痛・PMSの対処行動の実態を把握することを目的として、16件

の文献を対象に文献検討を行った。

分析の結果、月経痛・PMS の対処としては鎮痛剤の服用が最も多かったが、鎮痛剤についての知識不足により、効果的な服用ができていなかった。また、対処行動として、鎮痛剤の服用や温罨法が多かったが、その他の対処行動が乏しく、日常生活習慣を整えることや運動をすることが対処に繋がるという効果が認識されていなかった。

今後は、月経随伴症状とその対処方法についての正しい知識を提供するために、年齢や発達段階に応じた月経教育を継続的に実施する必要があると分かった。また、月経による学校生活への影響を学校側が理解し、月経痛に苦しむ学生に対して配慮できるよう、教員への月経についての正しい知識の提供が必要であることや、母親の「月経痛は我慢するべき」や「鎮痛剤は服用しない方が良い」といった誤った情報により、月経痛・PMS の対処をできていない者がいることから、母親への月経教育も必要であることが示唆された。

3. 出産施設と大学の協同によるオンライン子育てセミナーの開催報告

－母親のアンケート結果による評価とニーズ－

○岡倉 実咲¹⁾ 山下 恵¹⁾ 横手 直美¹⁾

吉田 明恵²⁾ 奥田 浩子²⁾ 川原 直子²⁾

1) 中部大学 生命健康科学部 保健看護学科 2) 春日井市民病院 看護局

中部大学では、乳児とその母親のためのエクササイズと育児教育を融合させた子育てセミナーを子育て支援の一環として行ってきたが、2020年度はコロナ禍で対面による開催ができなかった。実習施設でもある春日井市民病院も同様の状況にあったため、協同でオンライン子育てセミナーを11月に2回開催した。

プログラム構成は、ベビーマッサージ、ママのストレッチ、子育てミニレッスン、助産師とのおしゃべりタイムとした。ベビーマッサージは病院助産師が指導し、ママのストレッチとミニレッスン「赤ちゃんの発育発達とおもちゃの選び方」、「赤ちゃんのもしもの時の備え」は、大学教員が講義と演習を行った。おしゃべりタイムはブレイクアウトルームに分かれ、各ルーム5名前後で行った。

参加者の合計は、生後1か月～9か月の乳児と母親32組、保健看護学科の学生11名、幼児教育学科5名、スポーツ保健医療学科3名だった。アンケートの結果(N=30)、ベビーマッサージが「とてもよかった」80%、ママのストレッチが「とてもよかった」80%、子育てミニレッスンが「とても参考になった」86.7%、おしゃべりタイムが「とてもよかった」63.3%、今後もオンラインでのセミナーに「ぜひ参加したい」73.3%と大変好評だった。ミニレッスンで次に希望する内容は「赤ちゃんの健康や発育発達に関すること」56.7%、「母乳・離乳食に関すること」23.3%の順でニーズが高かった。

オンライン子育てセミナーは出産施設と大学の専門的人材・備品・配信システムを活用でき、コロナ禍で孤立しがちな母子の子育て支援として有効であった。